

次に紹介するのは「五人 土籠（つちのろう） 御書」の一節です。

「五人 土籠（つちのろう） 御書」は、宿屋（やどや）入道（法名を 最信（さいしん）、俗称を 光則（みつのり）という。北条 得宗（とくそう） 被官（ひかん）として時頼、時宗に仕えた。最初は極楽寺の良観*より念仏と律を受けていたが、後にお祖師様に帰依して住まいを寺にした）の邸の後ろにある土籠に入れられた日朗上人（お祖師様に常にお仕えしてお給仕申し上げていた）はじめ、不退転のご信心を貫き通して土籠に入れられている五人の御弟子に宛てられ十月三日付でお出しになったものです。この御消息（手紙）は、依智（えち）（今の神奈川県厚木市、佐渡守護の北条 宣時（のぶとき） の守護代、本間六郎左右衛門重連の邸の所在地）に連行されたお祖師様がお遣わしになったもので、

十月七日、佐渡の国に出発する旨を告げられ、五人の御弟子の身の上を案じて再会を約されています。

「今月七日さど（佐渡）の国へまかる（罷）なり。各各は法華經一部つつあそばして候へば我身並に父母、兄弟、存亡等に回向しましまし候らん。今夜のかん（寒）ずるにつけていよいよ我身より心くるしさ申ばかりなし。ろう（牢）をいで（出）させ給なば明年のはる（春）かならずきたり給へ。みみへ（見、見へ）まいらすべし。」

（昭定 506 頁）

「見、見えまいらすべし」というのは、お互いに、ぜひ会いたいものだという強い願望と意志が交じり合った言葉で、日蓮聖人のお気持ちが手に取るようにわかります。

また、もっと有名なのは、十月九日付の日朗上人宛の「土籠御書」で、この御書には同様に、

「日蓮は明日佐渡国へまかるなり。今夜のさむき（寒）に付てもろう（牢）のうちのありさま思やられていたはし（痛）くこそ候へ。あはれ殿は法華經一部を色心二法共にあそばしたる御身なれば、父母、六親、一切衆生をもたすけ給べき御身也。法華經を余人のよみ候は、口ばかりことば（言）ばかりはよめども心はよまず。心はよめども身によまず。色心二法共にあそばされたるこそ貴く候へ。『天諸童子以為給使刀杖不加毒不能害』と説れて候へば別の事はあるべからず。籠（ろう）をばし出させ給ひ候はばとくとくきたり給へ。見たてまつり見えたてまつらん。」

（昭定 509 頁）

と、おしたためになっています。これを現代語にしますと

「日蓮は明日、佐渡にまいることになった。今夜の寒いのにつけても牢のうちのありさまが思いやられ、いたわしくてならない。見事、あなた、日朗は法華經の經文すべてを身と心の両方で読んだ身の上であるから、父母、先祖、一切の人々を助けられる人である。法華經を他の人が読む場合、口ばかり言葉ばかりは読んでも心では読まない。心は読んでも身に読まない。身も心も読んでいるのは貴いことである。（法華經安樂行品に）「天の諸々の童子が給仕をして守るので、法敵が刀や杖をもって打とうとしても打つことができず、毒をもって危害を加えようとしてもできない」と説かれているので命を落とすようなこと

はない。籠を出られたら、速やかにこちらにおいでなさい。姿を見たい、お会いしようではないか」というようになるでしょう。

このすばらしい名文を読ませていただいて感激しない人はいません。名文というだけでなく、お祖師様のみ心が行間からにじみ出ている、御弟子を思われるその情にうたれるのです。お祖師様と心底からの御弟子との間には、法敵に迫害を受けても、なおかつというより、かえって、いっそう心と心が通いあい、固い絆によって運命を共にしようという決意なり死を覚悟した上でご信心を貫こうという気持ちが伝わってまいります。

*良観 建保五～嘉元元年（1217～1303） 西大寺 叡尊（えいそん）に師事し受戒。真言律宗に属す。良観と号す。戒律復興運動に加わり、1252 年、金沢実時の招きで鎌倉下向、常陸の三村寺に十年住す。1262 年（弘長 2 年）頃、北条業時創建の鎌倉多宝寺に住して鎌倉布教。北条時頼、長時の帰依を受けて光泉寺、極楽寺を開創。異国降伏の祈禱を引き受ける一方、幕府と呼応して社会事業を展開する。悲田院、施薬院の建設、貧民の救済、道路、橋梁の建設などを展開する。しかし、反面、関米を取り立てたり、住民を強制労働に駆り立てたり、高利貸しを行った。お祖師様は律宗の戒律は世の中を欺く誑惑の法で、彼は偽善者であると断じられた。また、お祖師様を讒言によって陥れようとしたり、その一味に鎌倉に放火させて日蓮聖人の弟子の仕業との風評を流したため、お祖師様は彼の名前をもじって両火房とお呼びになった。 御書「王舎城事」（建治元年 4 月。54 歳作。与四条金吾書とも称す。昭定 915～6 頁）には次のように記述されている。 「其上名と申す事は体を顕し候に、両火房と申す謗法の聖人鎌倉中の上下の師なり。一火は身にとどまりて極楽寺やけて地獄寺となりぬ。又一火は鎌倉にはなちて御所やけ候ぬ。又一火は現世の国をやきぬる上に、日本国の師弟ともに無間地獄に墮て、阿鼻の炎にもえ（燃）候べき先表なり。愚痴の法師等が智慧ある者の申事を用ひ候はぬは是体に候なり。不便不便。」